

匠 瑛

92

探訪

# 粥占神事

松山を歩く

正月を迎え各地の神社では新年ならではの特殊神事が行われます。匠瑛地区にある松山神社の「粥占神事」もその一つです。

松山神社は806年にまつられたとされ、1000年代には匠瑛郡内南部地域が熊野神社(和歌山県)の領地(荘園)であったため、熊野信仰の

拠点だったとみられます。

荘園管理のため紀州(和歌山県)から派遣された湯浅氏などは、荘園がなくなったのちも千葉氏との関係からこの神社を支えたのでしょう。

こうした由緒ある神社だったことから天正検地の後、1591年に松山村の一部が神社の所領(社領10石)として寄進されました。

神社周辺の村人は江戸時代、神社所有の田畑を耕作するなど神社とともに生きてきました。当時から松山権現(松山大明神、春日大明神などと呼ばれていました)が、明治時代に「松山神社」となりまし

た。

1984(昭和59)年に千葉県神社庁特殊神事編纂委員会が刊行した『房総の祭事』には、

松山神社の「粥占(夕膳祭)」が記載されています。それによると、14日の夕方から当番の家で米と小豆を混ぜ釜でたき、その中に宮司が準備した一握りほどの長さの竹筒52本を入れます。15日の早朝、神社の神前に釜ごと持参し、当番が竹筒を割り、宮司は竹筒の中の粥と小豆の入り具合によって吉凶を判断し神事目録に記載します。占うものは、五穀をはじめとする農作物、民生のこと、3月から9月までの日照り、雨水、風量の多寡などとされています。

こうした神占は、菅粥、筒粥神事などと呼ばれ、県内17か所の神社で行われていたことが『房総の祭事』に記載されています。

松山神社には1752年の「神社年中祭事社用帳」が伝わり、元日から大晦日までの行事と役割を担う村人の名前や七つの寺院名が詳しく書かれています。

この記録で確かなように260年以上続いている「粥占神事」。今年はどうのような吉凶が占われるのでしょうか。

(元 市職員・依知川雅一)

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080



松山神社で行われる粥占神事